

【研究ノート】

ブレイクとスウェーデンボルグ

新 見 肇 子

エマヌエル・スウェーデンボルグ（1688–1772）のウィリアム・ブレイク（1757–1827）への影響はしばしば指摘されてきた。このスウェーデンの神学者・神秘思想家は、ブレイクの『天国と地獄の結婚』（1790–93）において風刺的に取り扱われ、『作品解説目録』（1809）や『ミルトン』（1804–10）にその名が登場する。また、ブレイクには少なくとも 13 冊の他の作家、思想家の著作への書き込みが残存しているが、その中でスウェーデンボルグについては、3 冊の著書への書き込みをしている。これは、モートン・D・ペイリィが指摘するように、ブレイクのスウェーデンボルグへの強い関心を示していると言えるだろう（16）。

スウェーデンボルグはストックホルムに生まれ、初めは科学者としてさまざまな分野を探索し、後世に残る業績としては、太陽系生成論、大脳皮質機能の研究、結晶学、重航空機的设计など多岐にわたる。¹ とくに、46 歳のとき、鉱山技師としての学問と経験を集大成した論集を出版し、科学者として不動の名声を確立した。その後、「靈魂」の探求に向かい、生理学と解剖学の研究を続けたが、靈魂の物理的、生理学的研究にあきたらず、自己の内面世界、聖書や神話の研究を始めた。こうして 50 歳半ばから約 30 年間に、30 巻の神学的著作を出版した。このうちブレイクが書き込みをしているのは、『神の摂理』、『天界と地獄』および『神の愛と知恵』で、これらは、靈的な意味の研究、自身が体験した靈的な出来事や靈的世界の構造に関する論述である。また、後世発見された『夢日記』や『靈界日記』は彼自身の夢とその解釈、心靈的体験が記録されている。80 歳近くに

なって、彼の主張する革新的なキリスト教に対する宗教裁判がもとで、故国を離れ、ロンドンに渡り、著作活動を続けた。

ブレイクは『神の愛と知恵』（1763年ラテン語版、1788年英語版出版）² に対しては、他の2つの著作より、はるかに詳しいコメントを残している。これは、創造に関する5章（創造主、手段、構造、方法、目的）432節からなり、³ 愛、自然的なもの・霊的なもの・天的なもの、霊界・天界・地獄、霊・天使・悪魔、照応、状態、真理・善、流入、などスウェーデンボルグ神学の基礎になっている創造に関する独自の思想と用語およびその定義が詳述されている。以下、ブレイクが比較的長い書き込みをしている節を選び、スウェーデンボルグの原文とともに訳出を試みた。これを読めば、スウェーデンボルグの著述が彼の思想形成の一端を担っていたことがよくわかる。上に挙げた用語、天使との語らいなどの結構、心と肉体、自然的なもの・霊的なものという二元論など、明らかな両者の類似性が見られる。しかもこの論述が文学的想像力の産物ではないこと、近代科学において相当の業績を残した人物によるものであることは重要である。⁴ やがてブレイクがスウェーデンボルグから離れていくことになる決定的な相違もまた顕著なのである。彼の創作原理の特徴の一つは、他者のテキストとの真剣な「対話」を通して、自己の思想を鍛えていくことだが、ここでも、「スウェーデンボルグを媒介にして自分の思想を作り出している」（Paley 17）と言える。同意と反論が簡潔かつ明快に語られる書き込みは、時にブレイクの思考回路あるいは息づかいさえ感じさせる生きたテキストになっている。直接この神学者の名前が登場しないブレイクの作品においてもその影響は広く浸透し、⁵ 今後更なる系統的な比較研究が必要だろうが、ここでは両者のテキストを翻訳することによりその対話の特質を確認しておきたい。

『神の愛と知恵』より

10 〈スウェーデンボルグ〉

自然界と同じく、霊界においても、場所があり、したがって距離もある

ように見えるが、これらは、愛と知恵あるいは善と真理の靈的な親近性に
応じて見えるだけのことである、と言われてきた。このことから、主は天
使とともに天界に遍在するにもかかわらず、太陽のように天使の上高くに
見えるのである。さらに、愛と知恵の受容は主との親近性を生じさせるの
で、天使が存在している天界は、この受容によって主とより密接な親近性
を持つので、親近性がより少ない天界よりも主により近く見える。した
がって、三つある天界は、それぞれの天界の社会のように、まったく異
なっている。さらに、それらの下にある地獄は、愛と知恵を拒絶する度合
いに応じて遠くなる。これは人間についても同じで、主は、全地球上で人
の中にまた人とともにある。これはひとえに主が空間には存在しないため
である (6)。

〈ブレイク〉

愛するものは愛が彼の中に下降してくるのを感じ、もし知恵を持ってい
れば、それが主である「詩的精神」に由来するものであると認識するだろ
う (E603)。⁶

11 〈スウェーデンボルグ〉

すべての天界において、神は人であるというよりほかに神の觀念はない。
これは、天が全体としても部分としても、形姿において人に似ているから
だ。さらに、天を形成しているのは、天使たちとともにいる「聖性」〔神〕
であり、そこでは思考は天の形姿にしたがってなされるので、天使が神を
人間以外の形で考えることは不可能である。従って、天と結びついている
この世のものはみな、神について、自らの内面を見る時と同じように考え
る。つまり、自らの靈において考える。神は人であるというこの事実から、
すべての天使や靈魂の完璧な姿は人間である。これは天の形姿から生じる
が、その形姿はもっとも大きな部分においても最小の部分においても同じ
である。〔略〕創世記(1章26節および27節)に、人は神の姿に似せて造ら
れたとある。神はまたアブラハムらに人として姿を現わされた。賢人から

無知な者まで、古代人は神を人としてしか考えなかった。やがてアテネやローマにおけるように、複数の神を崇拝するようになったとき、人々は神々をすべて人として崇めた(後略)(6-7)。

〈ブレイク〉

コップが容量以上の水を入れることができないように、人は人より大きなものの観念を持つことはできない。しかし神が人であるのは、人が神を人として認識するからではなく、神が人の創造主だからだ(E603)。

〈スウェーデンボルグ〉

異教徒、とくにアフリカ人は、唯一神を宇宙の創造主と認め、崇拝しているが、神については人であると考え、誰もこれ以外の神の概念を持つことはできないと言明している。彼らは、神がものの真中にある雲のようなものと考え人間が多いと知ると、どこにそんな人間たちがいるのかといふかる。キリスト教徒の中に見られると告げられると、ありえないと断言する(7)。

〈ブレイク〉

白い雲を聖なるものと考えても、それを愛することはできないが、雲の中に聖人を思い浮かべれば、その想念の中に愛が湧きおこる。というのは、人の感情にとって、人間と分離した神聖さを思い浮かべることは不可能だからだ。想念だけが怪物を生み出すのであって、感情は決してそんなことはしない(E603)。

27 〈スウェーデンボルグ〉

健全な理性の持ち主なら「聖性」[神]が不可分であり、また無限なるものの、自存のもの、全能のもの、すなわち神が複数ではありえないと理解せざるをえない。理性を欠くものが、無限のもの、自存のもの、全能のもの、すなわち神が複数でありうるとたとえ断言しても、それらが同じ一つの本質を有し、この本質が、それらを一つの無限で、自存の、全能なもの、つまり神にするものでありさえすれば、その同じ一つの本質は一つの同一性

になるのではないだろうか。一つの同一性は複数のものにはありえない。あるものが他のもの[神]から生じるという場合、他から生じるそのものは、それ自身神ではない。しかし神自身は、そこからすべてのものが生じる神である(7)。

〈ブレイク〉

[上記6～7行目に対する]答え 本質は同一性ではない。本質から同一性が派生し、一つの本質から多くの同一性が生じるかもしれない。ちょうど一つの感情から多くの想念が生じるかもしれないように。ここの部分は、[スウェーデンボルグの]明らかな見落としである。

唯一の全能で自存であるもの、神しか存在しないことには同意するが、唯一の無限なるものということには反対である。なぜなら神の他はみな無限でないとしたら、それらは神が禁じている終末に近づくからだ。

もし本質がその同一性と同じであるなら、一つの同一性しかありえないことになる。これは誤りである。

天界は、この計画によれば時計にすぎないだろうが、その唯一の本質はしたがって本質であり同一性ではない(E604)。

49 〈スウェーデンボルグ〉

神について言えば、無限なものつまりその中に愛の本質と生命あるいは「聖性」を少しでも持っている他者と相互に愛したり、愛されたりすることは不可能である。なぜなら、あるものがその中に少しでも無限、つまり愛の本質と生命、すなわち「聖性」を有しているならば、それは他者が神を愛しているのではなく、神が自らを愛しているのである。無限なるもの、すなわち「聖性」は唯一つであり、これが他のものの中にあるとすれば、それ自身が他のものの中にあることになり、それ自身の自己愛ということになるだろう。その愛は「聖性」の本質と完全に対立するので、そのかけらほども神の中には見出せない。したがって、この関係[神との愛]が可能になるには、内に「聖性」を何も持たない他者がいなくてはならない(24)

(後略)。

〈ブレイク〉

誤謬。こう考えようが考えまいが、結論は同じである。あるものが愛すればそれは無限なのだから。おそらく我々[ブレイクとスウェーデンボルグ]の無限と永遠という語の意味が違っているだけだろう (E604)。

181 〈スウェーデンボルグ〉

愛と知恵に等級があるので、熱と光にも等級がある。熱と光というのは、天使が天界で持っていて、人は心の内部に持っているような霊的な熱と光のことである。それは、人が天使と同じような愛の熱と知恵の光を持っているからだ。天界では、天使が有している質と量に比例して、彼らの熱の質と量が決まる。天使の光についても同様に、彼らの知恵に匹敵する光がある。その理由は、天使に関しては、(上述のように)愛は熱の内にあり、知恵は光のうちにあるからだ。

これは地上の人間に関しても同様だが、次のような違いがある。つまり、天使は熱を感じ、光を見るが、人は自然の熱と光の中にいるので、そのようなことはない (88–89)。

〈ブレイク〉

彼[スウェーデンボルグ]は、人を霊の容れ物としてではなく、単なる地上の人間として語っている。そうでなければ、257 番の主張と矛盾している (E605)。

〈スウェーデンボルグ〉

人は自然の熱と光の中にいる間、愛のある種の享受によってしか霊的な熱を感じないし、真理の認識による以外に霊的な光を見ることはできない。人は自然の光と熱の中にいる限り、内にある霊的な熱と光のことをまったく知らないし、またこの熱と光は、霊的世界からの経験を通してしか知ることができないので、天使とその天界がそこにある熱と光について、地上では特にこう言われるだろう。この問題に関する解明は他のいかなる源で

もなく、これのみ、つまり熱と光からのみ得られる（89）。

〈ブレイク〉

これが文字通りには理解されないことは確かである。というのは、あらゆる経験に照らしてこれは虚偽だからだ。自らの内にある愛と知恵について知らない、あるいは知らないかもしれないような人がいるだろうか（E605）。

237 〈スウェーデンボルグ〉

これらの三つの高さの等級は、それぞれ自然的、霊的および天上的（略）と呼ばれる。人間は誕生するとまず自然的等級の中に入る。この等級は彼の中で連続することにより諸知識と、それによって理性的と呼ばれる最高点にまで達した悟性に従って成長する。しかし、これによつては、霊的と呼ばれる二つ目の等級は開かれない。この等級は、悟性の考えに従って、有益性を愛することによって開かれる。ただし、それは有益性に対する霊的な愛、すなわち隣人愛による。

この等級は、同じような方法で、連続する等級により高みに至る場合、真理と善の知識、すなわち霊的な真理によって成長する。しかし、天上的と呼ばれる第三の等級は、このような真理によつても開かれない。というのは、この等級は、有益性に対する天上的な愛、つまり主なる神への愛によつて開かれるからだ。そして主への愛は、生命を主の言葉の教えに委ねることに他ならない。その教えの要諦は、地獄と悪魔のものである悪から逃げることであり、天国と神のものであるから善を行うことである。こうして、これら三つの等級は人間の中に次々に開かれる（119）。

〈ブレイク〉

盲目になるまで諸学問を学べ

冷たくなるまで知的な事柄を学べ

それでも学問は知性を教授することはできない

ましてや知性は愛情を教授することはできない

したがって、次のような主張はいかにも馬鹿げている。一つの等級が三つの等級を受容するのに、人は一つの等級にのみ生まれるという主張だ。三つの等級のうちの二つを破壊するか閉じるかしなければ、それらは落ちていくだろう、もし上の二つの等級を閉じた場合、人は本当は第三の等級には入れず、むしろそこから出て単なる自然か地獄に落ちていく。

239 を見よ

また次のことは明白ではないだろうか。一つの等級は他の等級を開くことではないし、学問は知性を開くことはなく、それらの等級はばらばらで不連続で、照応以外にはお互いを説明することができない。なぜなら一つの等級によって、他の等級を例証することはできないからだ。その照応は例証とは無関係である。というのは、学問はそれらの等級を連続させ、ばらばらにしないで、いかにして知性を例証することができるだろうか (E605-606)。

257 〈スウェーデンボルグ〉

[原因を明確に表す]結果は以下のようである。(1) 自然の心は、天使の住む天界の光にまで高められるし、天使が霊的に認識するものを、自然に、したがって十分ではなく認識する。しかしながら、人間の自然の心は天使の光そのもののの中に高められることはない。

(2) 天国の光にまで高められた自然な心によって、人は考え、また 天使と語ることができる。しかしその時、天使の想念と言葉は人間の自然の想念と言葉に流入するが、その逆ではない。そのため、天使は人の母語である自然の言葉で話す。

(3) これは、自然なものへの霊的な流入によってもたらされるのであって、決して霊的なものへの自然の流入によってではない。

(4) 人が自然界に住む限り自然である人間の知恵は、決して天使の知恵に高められることはなく、ただ天使の知恵のある表象に高められる。というのは、自然の心の上昇は、影から光へ、あるいは粗野なものからより純粋

なものになるように、連続性によって起こるからだ。ただし、内部に霊的な等級が開いている人は死んだ場合、その知恵に達する。人はまた五感の停止によって、さらに上からの人の心の霊的な部分への流入によってもその知恵に達することができる（133-134）。

〈ブレイク〉

これは身体の中にある時である。

これは現代ではまれなことと理解されるが、古代ではふつうだと理解された（E606）。

(5) 人の自然の心は自然の物質とともに霊的な物質からも成り立っている。想念は心の霊的な物質から生じ、自然の物質からではない。後者は、人が死ぬと遠ざかるが、心の霊的な物質はそうではない。その結果、死後人が霊や天使になる場合、同じ心は、現世において持っていたような形で存在し続ける（134）。

〈ブレイク〉

多くの人は、人間があたかも肉体にとどまっている間だけ自然の物質と交わりがあるかのように彼[スウェーデンボルグ]を曲解している。それは、自分たち自身が欲得づくで世俗的で現世的利益以外には何も知らないからだ（E606）。

(6) 死によって後退する（と言われていたように）心の自然の物質は、霊や天使が持っている霊的な身体の皮膚の被いを形成している。自然界から取られたそのような被いによって、霊や天使の霊的な身体はその存在を維持する。それは、自然的なものが最も外側の容器だからだ。その結果、人間に生まれなかった霊も天使もない。このような天使の知恵の奥義は、ここでは人間の中にある自然の心の特徴がわかるという証拠として示される（134-135）。

267 〈スウェーデンボルグ〉

(2) 悪人は悪と虚偽を強固にするためにこれらの能力[理性と自律性]を

悪用するが、善人は善と真理を強固にするためにそれらを使う。人は、理性と呼ばれる知的能力と自律性と呼ばれる自発的能力から、望むものすべてを強固にするための才能を引き出す。というのは、自然的人間は自分が欲するどのような高い光にでもその悟性を高めることができるが、悪や虚偽の中にいる者はそこから自然の心の上層部以上には悟性を高めることはできず、霊的な心の境界まで至ることはまれである。人が自然の心の愛の喜びに浸っているために、また人が悟性を自然の心以上に高めるとき、その愛の喜びは消える。また、悟性がさらに高められ、自己の命の喜びや自己知識の原理に反する真理を知るとき、人は、それらの真理を捻じ曲げるか無視して、侮蔑的に打ち捨てるか、あるいは命の愛か自己知識の自慢に役立つ手段として記憶の中にそれらを留める。自然的人間が、望むものは何でも強固にすることができるということは、キリスト教世界における多くの異端の存在から明らかであり、異端一つ一つは帰依者によって強固にされている。

あらゆる種類の悪と虚偽は強固にされるということを知らない者がいるだろうか。次のようなことは強固にされるし、悪人によっては自己の内部で強固にされる。すなわち、神は存在しないと自然がすべてであり、自然は自らを生み出したとか、あるいは宗教は単純な心を束縛しておく手段に過ぎない、人間の分別は何でもやれるが、神の摂理は宇宙をそれが創造された秩序の中に保つ以外何も行わない、さらに殺人、姦淫、窃盗、詐欺、復讐は、マキャベリとその追隨者が信じたように、許されるなどである。

自然的人間は、これらのこと、あるいは他の類似のことを強固にすることができ、強固にしたもので何冊の本にもなるほどだ。そのような虚偽は強固にされると、人を惑わす光の中に現れるが、真理の方は夜の亡霊としか見られないような漠然とした状態の中に現れる。約言すれば、もっとも虚偽であるものを取り上げて、仮説として示し、才知に富む人にそれを証明するよう頼んでみれば、その人は、真理の光が完全に消滅するまで証明しようとするだろう。しかし、その人が強固にしたものは別として、ひる

がえて、自分の理性から仮説自体を検討してみれば、これ以上ないほど歪んだ虚偽の姿を見出すだろう。このことから、人間はあらゆる種類の悪や虚偽を強固にするために、神から授かった二つの能力を悪用することができる。これらの能力を持っていないから、獣にはこれではできない。したがって、獣は生命の全秩序と自然的愛の全知識の中に生まれるが、人間はそうではない（141-143）。

〈ブレイク〉

このような言辞のあとで、高めるものはすべて自己であり、高めることは熱狂と狂気であると誰があえて言うだろうか。また自己が引き出した知性は、現世的例証だということは明白ではないだろうか（E606）。

注

1 スウェーデンボルグの伝記的事実については、高橋和夫訳『天界と地獄』（春秋社、1997年）の「解説」171-175ページを参照した。

2 『神の愛と知恵』は1788年、Nathaniel Tuckerによって初めてラテン語から英訳された。ブレイクが読んだのもこの版で、書き込みをしたテキストは現在大英博物館にある。訳出にあたっては、1885年、スウェーデンボルグ協会から出されたJohn C. Agerの英訳版、Emanuel Swedenborg, *Angelic Wisdom concerning Divine Love and Wisdom* (Standard Edition. West Chester, Pennsylvania: Swedenborg Foundation, 1995)を用いた。引用した各節の末尾のカッコ内にページ数を記した。

3 『神の愛と知恵』を含めて、スウェーデンボルグの著作の思想的、神学的特質についての解説は、Martin Lamm, *Emanuel Swedenborg: The Development of His Thought* (West Chester, Pennsylvania: Swedenborg Foundation, 2000)が詳しい。

4 高橋和夫氏が指摘する『天界と地獄』の特色（上掲訳書中の「本書の構成と特色」188ページ）は、大部分が『神の愛と知恵』にもあてはまる。

5 *Blake and Swedenborg* (1985) 所収のMorton D. Paley、Peter M. Bussの論文参照。

6 ブレイクの書き込みについては、*The Complete Poetry and Prose of William Blake*, ed. David V. Erdaman (rev. edn., Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1982)を用いた。引用文末尾のカッコ内に（E605）のように、ページ数を記した。ブレイクの原文には句読点がほとんどないが、訳文では、文意から明瞭な場合は、適宜句読点を補った。

引用文献

Paley, Morton D. “‘A New Heaven Is Begun’: Blake and Swedenborgianism.”

Blake and Swedenborg: Opposition Is True Friendship. Eds. Harvey F. Bellin and Darrell Ruhl. West Chester, Pennsylvania: Swedenborg Foundation, 1985. 15–34.